

# 特集

## 小児の肺機能の画像による評価/臨床的応用と最近の進歩

*Evaluation of Lung Function with Imaging in Children/  
Clinical Applicability and Recent Advances*

### 特集を企画するにあたって

望月博之

群馬大学医学部 小児科

Hiroyuki Mochiduki

Department of Pediatrics, Gunma University School of Medicine

近年、日常の診療にあたり、インフォームド  
コンセントの必要性を常に考えなければなら  
ず、従来はルーチンワークとして行ってきたく  
つかの検査や手技、負荷試験などが、保護者  
の同意書がなければ行うことができなくな  
りました。また、保険診療としての医療の考  
え方が、以前に増して診療の流れに影響し  
ていると思われ

れます。  
一方、最近の呼吸器関係のジャーナルを手  
にして思うのは、小児科医にとっては侵襲  
的でありすぎると思われる方法による検討  
の報告が、これまでになく増えたような  
気がします。侵襲的な報告ほど、ジャー  
ナルに掲載されやすいと思うのは邪推  
ですが、侵襲的であるがゆえに的確に  
病態の把握ができていくかといえ

ば、すべてに肯定もできません。い  
ずれにせよ、非侵襲的で、より精密に、  
より特異性の高い検査が望まれるのが  
現状です。  
この点、近年の画像診断には目を見張  
るものがあり、呼吸器系の検査にも、  
CT、MRI、核医学的手法などが取り込  
まれ、これまで侵襲性の強い手技に  
頼っていた検査などが、非侵襲的な  
検査に取って代るようになりました。  
さらに、分肺機能、局所肺機能の測定  
も可能ですので、従来のマウスピース  
を用いる肺機能検査より優

れた側面を持ち合わせていることになり  
ます。これらのテクニックを用いて、乳幼  
児の肺機能の解析を行うことは、小児の  
呼吸器疾患やアレルギー疾患の病因や  
病態を検討する上で重要な意義を持つ  
ものと思われ、新しい側面を示してく  
れると考えました。

編集委員として特集を組むことは、お  
そらくこれが最初で最後かと思ひ、あれ  
これ思案しましたが、やはり私自身が最  
も興味深く思う点につき、答えていただ  
ければと願って選びました。すなわち、  
画像を中心とした局所の肺機能の定量  
化や動態としての肺の機能解析など、  
肺機能測定の新しい解釈がどこまで可  
能か、ということです。小児の呼吸器、  
アレルギーの臨床で、以前から議論の  
対象となっている乳幼児の肺機能測定  
の問題も含まれるわけで、肺機能測定  
は肺機能測定室でという固定観念を離  
れた議論ができれば、と思ひました。

しかしながら、今回の特集はやや狭い  
分野でのテーマとなってしまいました。  
ご執筆願いました各先生方におかれま  
しては、普段と違うご苦勞をなされた  
かと思ひますので、この場をお借りし  
て、心より感謝申し上げます。また、  
この特集が、読者諸氏の今後のご研  
鑽にお役立て頂ければ幸いです。